

WS-4

多様性を促進する医学科入試とは：英国とオランダの事例から学ぶ

日時：2026年6月6日（土） 9：00 ～ 12：00

企画：大滝純司（東京医科大学）、鈴木康之（岐阜大学）、渡邊洋子（新潟大学）、
恒川幸司（名古屋市立大学）、武田裕子（順天堂大学）、
西城卓也・野村理（岐阜大学 MEDC）、平形道人（慶應義塾大学）

対象

大学入試や IR 関係者、高校教員、メディア関係者、医学教育研究者、医療者教育に興味がある人。

概要

医学科入試に関する課題の一つである「教育格差による受験者の多様性の低下に関する懸念」について、冒頭で論点整理を行う。次に、日本国内で行われた調査研究結果を紹介し、教育格差が医学生が多様性に大きく影響している可能性を示す。つづいて参加者の問題意識をグループワークにより共有する。後半では、英国とオランダにおける教育格差対策としての医学科入試の改革について、2025年秋に行った訪問調査の成果を含めて報告する。英国では医師の構成を人口構成に近づけることを目指した **Widening participation** 政策が進行中であり、オランダでは医学生が多様性を維持することを目的に医学科入試に抽選制が再導入された。これらの情報を共有したのちに、全体で質疑応答や意見交換を行う。このワークショップを通じて、医学科入試における多様性の課題とその対策についてより広い視野で検討することが可能になる。

報告概略

1. 参加者とグループ編成

参加者募集の締切までに全国から30名の申し込みがあり、そのうち29名は所属が大学であった。

事前に6名×5グループに編成した。私立大学そして三大都市圏の大学が多数を占めていたため、状況が似ている参加者同士が交流して少数意見も述べやすくすることを目指して、国公立大学所属の参加者を2つのグループに集中させ、そのうち1グループは三大都市圏以外の大学とした。そのうえで、一つの大学から複数に参加された場合は可能な限り分散させて編成した。

開催当日は24名が参加された。各グループの人数は4～6名にばらついたが、編成は変更せずに実施した。

2. 会場準備と進行

会場の机といすをグループワーク用に設営し終了後は原状復帰する作業は、運営スタッフと企画担当者、そして一部の参加者の支援も得て滞りなく行うことができた。

ワークショップはほぼ事前の計画通り進行できたが、オリエンテーションと一部の講演は予定よりも若干延長となり、最後のまとめの時間が不足したまま終了した。そのまとめの内容を補うために、企画独自の事後アンケートを参加者にメールで案内する際に、追加

の情報（後述）を配信した。

3. オリエンテーションと過去の調査研究

オリエンテーション（担当：大滝）では、教育格差の拡大が指摘される中、少子化の加速や高額な受験対策費用の実態も紹介し、受験者の多様性の低下が懸念されていることを述べた。

つづいて、これまでに企画者たちが行ってきた日本国内での調査研究の結果を報告した（担当：鈴木、大滝）。教育、所得、地域などの格差が医学科入試に影響しており、特に大都市の裕福な家庭出身という環境が受験に有利に働いている様子や、親が大卒でない学生が医学科では極端に少ないこと、いわゆる受験学力を重視する傾向が郡部よりも都市部の住民にみられることなどを提示した¹⁾⁴⁾。また、実態を正確かつ詳細に把握できるほどにはデータが得られていないことにも触れた。

4. グループワークと全体発表

参加者の間で医学科入試の現状や多様性への対応に関する課題を中心に、活発で幅広い議論や情報共有が行われた。医学科入学前の受験対策中心の学習から入学後の自己主導型の学習への転換が困難な学生の問題、学力以外の試験方法による選抜の難しさ、地域枠制度で勤務先を縛ることの限界、受験科目を設定する根拠の乏しさ、医師という職業における世襲の是非、1点刻みの学力試験の点数で合否が決まる明快さに変わる方法の模索、私学の合格者が大量に他学に流れる実態、試験方法の見直しと受験対策のイタチごっこ、特別枠を設けた場合に倍率が低下するリスク、全体的な学力低下、入試体制の秘密主義、移民を含む海外からの受験者への対応など、企画側が想定していた以上に多様な話題で盛り上がった。

5. 英国とオランダの入試制度改革

休憩を挟んで後半では、渡邊から英国の医学科入試において階層間の格差を是正し患者と医療者の人口構成を同じにすることを目指して行われているWidening Participationについて⁵⁾⁶⁾、そして鈴木からはオランダの医学科入試に再導入され始めている抽選制度について、両国を訪問して関係者と面談して収集した資料や情報を基に講演形式で報告した。

その後の質疑では、日本の現状との違いの大きさ、基礎的な学力を保証する方法、受験生の個人情報の扱い、格差の是正により期待される効果やその根拠、移民の扱い、医療制度の違いの影響などについて活発な意見交換が行われた。

その一方で、論点が拡散したために英国やオランダと日本との比較に議論が集まり、今後の日本での医学科入試にどのような点が参考になるのか、その具体的な検討をするには時間が不足した。

6. まとめと事後アンケート

この課題が事前の予想よりはるかに多くの参加者の関心と課題点・論点を含むものであることが実感された。講演資料を参加者に事後配布すると共に事後アンケートを行った。さらに、企画者からのまとめに代えて、今後の検討課題として、以下の3点を提示した。

- ①医学科入試関連データの共有やそれに基づいた研究
- ②医学科受験を支援するための公的な情報提供
- ③医学科受験を早期に諦める層への介入

また、今年の夏に富山で開催される医学教育学会の学術大会において教育社会学者の松岡亮二氏を招いてシンポジウム「医学科受験における教育格差の現状と対策：より広い視野で考えよう」を行うことも紹介した。

引用文献

- 1) Otaki J, Taketomi K, Shibahara M, Watanabe Y, Nagata-Kobayashi S, Harada Y, et al. Factors that hinder medical career aspirations: A nationwide questionnaire survey of teachers in charge of career guidance in Japanese high schools. PLoS One 2022; 17(6): e0270477. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0270477>
- 2) Otaki J, Watanabe Y, Harada Y, Mitoma H. What Are the Important Qualities and Abilities of Future Doctors? A Nationwide Attitude Survey in Japan. Educ Sci 2024; 14(5): 533. <https://doi.org/10.3390/educsci14050533>
- 3) Suzuki Y, Tsunekawa K, Takeda Y, Saiki T. Impact of medical students' socioeconomic backgrounds on medical school application, admission and migration in Japan: a web-based survey. BMJ Open 2023; 13: e073559. <https://doi.org/10.1136/bmjopen-2023-073559>
- 4) 鈴木康之, 野村 理, 恒川幸司, 西城卓也, 武田裕子. 大学第一世代医学生の社会的・教育的背景に関するオンライン質問紙調査. 医学教育 2025; 56: 171-175.
- 5) Steven K, Dowell J, Jackson C, Steven BG. Fair access to medicine? Retrospective analysis of UK medical schools application data 2009-2012 using three measures of socioeconomic status. BMC Med Educ 2016; 16:11. <https://doi.org/10.1186/s12909-016-0536-1>
- 6) 渡邊洋子, 大滝純司. 英国における Widening Participation Policy in Medicine —医学部における入学者選抜改革の現段階と論点. 創生ジャーナル Human and Society 2025; 8: 147-154.

スケジュール

6月6日(土)	
9:00	オリエンテーション
9:15	(講演) 過去の調査研究の紹介
9:35	参加者の問題意識に関するグループワーク
10:15	グループワークで話し合われた内容の紹介
10:35	休憩
10:45	(講演) 英国における WP の経緯と現状と課題
11:15	(講演) オランダにおける抽選制度の変遷と課題
11:30	質疑応答
11:55	まとめ